

わが園の日記

京都日彰幼稚園

逝ける園児の佛

我がいとしい／＼Kさんはなせ死んだのだらう。もう、永久に／＼歸らないのだと、一日に一度や二度は必ず其の佛が思ひ浮ばぬ日はないのだ。戸棚の中に多くの園児のものと共に、積み重ねた成績物のうちには、彼のいぢらしいKさんの思ひ出もあり、樂みのあとも残つて居る。出し入れの時には、きつとそれが目にふれる。其の度に胸をつかれるせつなの涙は、いつまでも忘れることの出来ぬものである。夫婦の中にたつた一つづ種の男の子であつた。わけて母親は此の子を何物にも更へ難い玉ども、寶ども思つて、我身をかまふいとまも惜しく、愛でいつくしんだ。傍から見では餘りに親ばかとも見ゆる位に。それで、子供は實に獨兒のためしにもれず、優柔不斷の甘へ子だつた。幼稚園に入つてからも、中々友となれず、保母となじまず、母親の傍を少しもはなれぬ。一週間経つても、十日たつても、同じであつた。種々ど、すかしもし、なだめもして、母の手から受取らうとする、けれども、母の後にしがみつき、物おちの目附でぢつと見つめてゐるのであつた。來年からは、學校へ登らねばならぬのだから、これでは其の時になつて困るといふ親御の思ひで、何とかして手ばなす工夫をめぐらしたいのであつた。可愛ければこそ、いたい目も見せたのだらう。今日、門迄で送つてくれたら、一人で幼稚園に居ると云ひだしたとて、母親は、いそ／＼と送りて來る。門迄で來て別れようとするど、中迄で來てくれと、手拭を引張るから、そんなら「今日だけだよ」と云つて中迄でつれて來る。だが友達や保母などを見ると、また、其の勇氣もくぢけてしまい、母の後にかくれてはなれぬ。若い母親は精も根もつきはて、泣かぬばかりに困つて居られた。其れを見ては、氣の毒でたまらず、

何もためしだと思つて、無理に母の手からもぎ取つて、母を歸し、泣く子を抱いてつれ行き、種々氣に入りさうな言葉を並べたり、繪本をひろげて話かけたりした。一時は、煙にまかれて泣き止むが、又、思ひ出しては、しくしくとペンをかく。いぢらしくもあり、あきれもした。母は、歸るにも氣にかゝるものと見えて、窓の外にたゝすんで、中の様子をうかがつて居る。子供も母を尋ねて窓の外を見るのであつた。もし、母が見附けられたらおしまい、子供は泣きさけぶ。かうした日が十數日も續いてゐた。其の間に幾分あきらめたものか、父母の心念が通つたものか、遂には一人で来るやうになつたのも不思議であつた。雨の日や道の悪い時の他は、一人で来るやうになつた。けれども餘り口をひらかなかつた。手を取つて連れ立つて居ても、知らぬまにすりぬけて隅の方へいつてじつとこちらを見つめて居る。「Kさんは？」と云つて尋ねて見ると、目をそらしてふつとあらぬ方を見る。かうした子供であつた。母親そっくりの色の白い、血色のいゝ女にせまほし程の愛くるしい子であつた。それで、いつもニコ／＼としてゐた。「先生これ」と描方などの時には得意になつて見せつける様にもなつてゐた。軍艦や飛行機が得意であつたが餘り巧みではなかつた。しかし、利口な性だつた。けれどもいたいけ盛りの子供にくらべては、いと、因循な方であつた。しかしとにかく私にとつて印象の深いことは例のない位である。

年々に流行する病も、世が進むにつれて劇しくなり行き、津々浦々のはてまでも、病魔におそはれない、所はなく、人心恟々として戦いてゐる實に此年の流感にて、悲惨極まる物語もいと多いことは、日々の新聞の報ずる所である。それがため學校や幼稚園等は、すべて休業の止むなきことになつて相前後して何れも閉鎖した。我が園も十七日閉鎖した。此の長い休みの間には、随分心を冷した事實も聞知した。どうか我が身邊にかゝるいたましい事實がなければよいがと思つてゐたが、あゝ遂にかうした悲惨事を私も經驗せねばならなかつた。丁度休みもすみ、明日の三日からは出勤すると云ふ前々日あたりから、どんなにそれが待たれた事だらう。其の日となつた。氣も心もそゝる浮き立つ思ひで勇んで出勤した。兒供達も同じ心であつたのだ。姿を見るやとんで来て「お早う／＼」「先生御機嫌よう」の聲をあびせかけられて、身邊にまつはる。足のふみ

どもない位。皆いき／＼としてよろこびの光にかゝやいてゐる。あゝ美しい愛らしい子等よいつもより多く幸福が感ぜられた。保母室に入つて何氣なく机上にのせられた届書をとり上げて讀んで見た。と、私は自分で自分の目をうたがつた。唯だ今のさきの喜びに満ちた晴れ／＼しい心も、たちまち、黒い／＼雲にとざされた。「あ、あのKさん」が……何度讀んでも幾度讀み返しても事實であるから仕方がない。あゝこゝにも無情の嵐は吹いたのだ。まだ／＼かたい／＼つぼみの花を、無慘にももぎ取つたのだ。あゝ可愛いさうだ／＼と、ひとり袖をしぼつて居つた。そこへ小使が来て「ほんとにKさんの御家は御氣の毒な事でした。お子さんばかりでなく、母御さんも死なれました」。そのこと。聞くに堪へない悲しみではないか。神も佛もない人の世かと、涙も出ない程いたましく思つた。其の日、私は主任と共に、其の家へ悔みに行つたのだつた。表戸を明けるや、家中は悲しみにとざ／＼れて居ることが明らかであつた。老母の方とKさんの父親と、たつた二人きりであつた。彼等の悔がどんなに悲痛な感じであつたかと云ふことは、深い／＼經驗をもつて居る私にはよく察せられた。思ふやうに悔の言葉が出なかつた。父親は一言も語らなかつた。皆、老母の口から聞くのであつた。佛前に導かれた。二つの新しい大小の位牌は立ち上る香煙につゝまれて、安らかに永き眠を語つてゐる。水を手向け、香をたいて、ふし拜む。知らず、涙は止め度なく流れる。他人の上とは思はれなかつた。今しがた、父親は、數々の玩具を取り出して、ありし昔の愛兒の持ちなしたかたみを見て涙にくれてゐたのであつた。せめては、それも心やりの一つなのであらう。父親は、さすがに男だけに涙は見せないが、其の悲しみを堪へ／＼て涙をのんで居ることは、よく察せらるゝのである。最愛の妻や子供を一時に失なつたのだもの氣の狂はぬのが不思議な位だ。眼の底には、此の運命を呪ひ呪ふそのかげは、語らずとも相知れてゐる。ほんとうに何と言つてなぐさめん言葉も見出すことは出来なかつた。老母の方の靜かに語らるゝを聞いては、實に斷腸の思ひがした。子供が三四日先きに牀に就いたので、母親は寢食も打ち忘れ身も心もささげつくして我子の看護に腐心した、子供の病勢は其の甲斐もなく肺炎とまで進んだ。母親は、狂せんばかりに悲んだ。遂にかうした中に、病氣は母親に感染してしまつた。

母親の病氣は、一層劇烈であつた、二日ほどで危篤となつた。隣合つた室に、母と子が、病に苦んでゐる。母は子を呼び、子は母を慕ひ求むる様は、實に――悲惨で目もあてられぬ様だつたこと、あゝ遂に――母は我が子を殘して永眠した。子供も、一日おいて、母の後を追うた。子は母の死を知らず、母は子の死を見ずに、永く眠に就いてしまつた。定めしよみちにいつて、再び手を取り合つて長い――旅路をゆくことであらう。運命の神様は此親子のものに對してつれなかつたのであらうか。又は、すくはれたのであらうか。神でない限りはわからぬのである。「神様よねがはくば此のあはれ縁深き母と子を、安けき道に導かせ給ひ、永久に――愛でいつくしみ給へ」と祈らずには居られなかつた。

○感激の一しづく

實習科卒業生 え い 子

師の君より、宮中拜觀の光榮に浴すべければとの仰せ承りてより、たゞ心おどり、もう一日よ、二日よと、おまなこの正月待つ心地にもまして、待ちわびぬ。白襟に紋付など、より――にしのびやかに語らふも女らしくもやさしくおさへきれぬ喜びのあふれとも覺ゆ。

三月二十五日。あゝこの世にあらん限りの思ひとなりしこの日。朝の程よりあやしき空のやがて降り出したるは口惜し。本校、實習科、専攻科、委託生の順にならびて、うれしさにさわきたかまる胸おしづめて校門を出ては八時十分。九時過ぐる頃御所につきぬ。

こはぶきの聲一つさえたてず、たゞサクリ――と靴の音のみ耳たちて、これなかりせばと思はるゝ迄の静けさ。呼吸くるしさに我にかへれば、何時のほどよりか息をもつかずにおそれかしこみて歩きしにて、之を幾度か繰返しつ。

玉座の御邊り拜し奉りては、たゞ――身のわな――を覺えつ。やんごとなき御方様の、あの内苑門の御内こそ常の御まじどころと承りてはたゞ頭さがりてはるかに拜しあげつ。

玉芽の道如何にたどりしや、つゆ知らぬまに紅葉山に身ははこばれぬ。

しるしつらぬるにはあまりに壯麗なりしよ。たゞ――、何らやらも遠き日の夢ごとの程にて、うれしきは胸にたゞよひ夢の中に夢見る心地すれど、この光榮はげに夢にはあらざりし。

ときはなる松の緑のいやふかく

君を千歳と田鶴のまふなる